

消防の仕事は、火災をはじめ各種の事故、災害に係わりをもつが、その発生予防という事前対策までも消防の主掌範囲に属するという点では、火災を最主要的の対象と見てよいであろう。従って、ここでは視点を火災に絞り、これと取り組む消防科学の在り方について私見を若干述べさせていただく。

火災は日常、様々な場所で様々な形で起こり、様々な物的損害をもたらし、また、しばしば人命の損失を招く。大きく分けても建物火災、林野火災、車両火災等々があり、さらに建物火災と一口に言っても、建物の構造、規模、用途などが違えば、そこで起こる火災の形態や被害の様相も複雑に変わってくる。

消防科学の役割は、これら複雑多様な各種火災の危険像を科学的に解明することによって、より効率的な火災対策の開拓ないしは確立に必要な基礎知識、指針などを提供することであろうと考える。

火災の危険像解明には、一般の科学的作業でよく行われるように、実相の複雑さをもたらず影響因子の幾つかを一時的に視野から外し、捨象、抽象化の目で本質的な面を見さだめるといった操作も必要である。ただし、こうして得られた「本質」に、先刻度外視した諸因子を復元、加味し

ていくと、実相の複雑さがどんな具合に形成されていくかの検討も忘れてはならない。すなわち、「実相」と「本質」との間の to-and-fro (行きつ戻りつ) が必要、ということである。

さらに、火災は本来、多くの専門分野に係わりをもつ多様な事象と認識することも必要である。たとえば、同じタバコの火、マッチ1本の火を原因としても、ときに家屋の火災となり、あるときは山火事となる。また、タバコやマッチの、小さいが火そのものが火災のもとをなす以外に、電気器具、配線の過熱や静電気の火花など、電気エネルギーから熱エネルギーへの転化が原因をなす場合もある。火災時の火熱や煙、ガスの人体に対する作用を考える場合は、医学、生理学、毒物学などが関係する。さらに火災原因の中で、人間のついウっかりによる失火や故意による放火などの比率が、時とともにどう変わっているか、という問題をつっこんで考えるには、心理学、社会学の知恵も必

要になる。

これらを思えば、消防科学というものも、必然的に多元性の、当世風にいえば多領域的 (multi-disciplinary) の複合科学と考えるべきことを、この際、強調しておきたい。

随 想

消 防 科 学 雑 考

熊 野 陽 平
(元消防研究所長)